

「第 4 回活力ある経済社会を目指す検討小委員会」における主な意見

活力ある経済社会に関する方向性等について

論点 3) ものづくり基盤の強化

- ・ 「人材の多様性を踏まえた新たな人材育成環境の構築（女性人材、ニートの雇用等）」について、情報の観点が弱い。情報社会の新しい雇用形態である在宅勤務は、女性の社会進出に欠かせない。
- ・ ものづくり基盤が強化されているものの、それが活用されていないと言える。トライアル発注制度のような施策も有効である。
- ・ 大都市部に比べ、地方の工業系の高校生は勤勉な生徒が多いと大企業から高く評価されている。実業高校が輝いていけるような、地域の企業と一体となったシステムの構築が必要。
- ・ 若年人材が不足している現状には、教育構造自体に問題があると考えられる。
- ・ もっと「職人文化」を大切にしなければならず、そういう教育が必要。「職人文化」を大切にする欧州では、世界に誇る陶器、ファッション、伝統工芸品等が存在し、それが観光集客にもつながっている。
- ・ 工場労働だけがものづくりではなく、伝統工芸や芸術などもものづくりである。社会が若者に多くの選択肢を提供すべきである。
- ・ 求人・求職のミスマッチは、技術職の職場の魅力低下や、不利な就業条件が原因となっている可能性もある。
- ・ インターンシップはよい枠組みだと思うが、どのように有効に機能させるかの検討が必要である。

論点 4) 観光資源等による魅力創出

- ・ 九州における豊富な資源を対外的に発信できる高度な人材育成が重要である。現場を支える人材だけではなく、戦略的にプランニングし、プロモートする人材も必要である。
- ・ 県境の地域において、広域的な観点でどう位置づけていくのか、プロデュースする人材が不足していると感じる。
- ・ 例えば湯布院では、経営者が厳しい目で経営をしている。こういった試行錯誤で進めてきた知識を体系立ててまとめて、共有知化すれば武器になる。

論点 6) 持続的な成長を牽引する都市圏の形成

- ・ アジアとの日帰りビジネス圏の形成によってコンテンツ産業の拠点化の実現の可能性が高まっている。海外の優秀な人材を惹きつけるための魅力的な地域づくり、都市づくりが重要である。
- ・ 人口減少の条件下では、都市機能をコンパクト化し、メリハリのある活性化を目指さないといけない。
- ・ 平成の大合併時の「中央に集積させない」という公約がコンパクトシティの実現の足かせになっている。国の視点でコンパクトシティの必要性を盛り込むことが重要だと思う。

論点 3) 4) 6) に関する意見

- ・ 子育て環境整備からローカル教育とグローバル教育、ものづくりの担い手、観光人材、アジア人材など、人材育成は戦略としてまとめた方がよい。新たな公も含めて柱として打ち出すとよいと思う。ただし、九州らしさをどのように入れるかが重要である。

活力ある経済発展を目指す小委員会 中間レポート（素案）について

第1章

- ・ 格差社会に関する危機感が全体的に薄い。九州のなかの南北格差、九州のなかの産業間格差があるということを、現状として認識しておくべきである。
- ・ 産業構造の転換の部分について、情報通信業の占める割合、就業者の比率など情報産業にかかわる現状を挿入してはどうか。
- ・ 産業構造の転換の部分について、建設業等地域経済の現状の厳しさの強調と、林業についてのコメントの拡充を希望する。

第2章

- ・ 未完成の高速道路整備を急ぎ、企業立地のポテンシャルを活かすことを入れてほしい。交通基盤がないために潜在力が失われているということを課題として書いてほしい。
- ・ 次世代産業の育成の部分について、エネルギーも重要だが、情報も入れるべきである。
- ・ 知識産業はものづくりとは別に考えた方が整理しやすい。原料も製品も知識という新しい産業として九州の戦略が出せるのではないか。
- ・ インキュベータの機能を街なかで高めることが必要である。都市の魅力を高めるために苗床機能を記載すべきである。

第3章

- ・ 提言集の具体性を活かしてもらいたい。
- ・ 交通基盤に劣らず、情報基盤は強調すべきである。
- ・ 情報についても基盤だけでなく、研究開発やコンテンツなど情報自体が産業となっているような知識財産業の振興が大切である。

構成全般

- ・ 検討小委員会のレポートは、構成よりも内容と具体性を補完したほうがよい。
- ・ 地域格差を抱えた九州がグローバル競争の中で発展攻勢をかけるために、各論点を単独で語るのではなく、マトリックスのように横通しするのが戦略的である。
- ・ 1章と2章から3章へのつながりが不明確ではないか。
- ・ 人材については、3つの検討小委員会のレポートを立体的に組み合わせたキックオフレポートで大きく取り扱う考えであり、第3章には入れない。